

『教行信証』「真仏土卷」所引『涅槃經』の文の意義

伊 東 惠 深

はじめに

阿弥陀仏とその浄土は、これまで多くの浄土経典において、一切衆生の理想郷として感覺的・情緒的に描かれてきた。例えば『大無量寿経』には次のように記されている。

阿難白^{サクニ}レ仏。法蔵菩薩、為^シ已成^ニ仏^ニ而取^{リトヘリト}。滅度^ヲ、為^レ未^ク成^シ仏^ニ、為^シ今^ニ現在^ニ。仏告^{ケドハク}。阿難^ニ。法蔵菩薩、今已成^ニ仏^ニ、現在^ニ西方^ニ。去^{ルコトヲ}レ此^ノ十方億刹^ヲ。其^ノ仏世界^ヲ名^メ曰^フ安樂^ト。阿難又問^{ヒテラフ}。其^ノ仏成道^{シトヒテヨリ}。已来^レ、為^レ逕^{クリヤ}幾時^ノ。仏言^フ。成仏^{ヨリ}已来^{ソドヘリ}、凡歷^シ十劫^ヲ。其^ノ仏国土^ハ、自然七宝^ノ、金・銀・瑠璃・珊瑚・琥珀・砮磈・磤磤、合^{シテ}成^レ為^レ地^ト。

（『真聖全』一、一五頁）

これは、釈尊が阿難に対して阿弥陀仏とその国土について教示しているところであるが、法蔵菩薩はすでに成仏して西方十万億刹の彼方に在し、またその国土は自然の七宝によって荘嚴された世界として語られている。このよ

うに浄土経典には、阿弥陀仏の相好と浄土の様相とが具体的に説かれているのである。

しかし親鸞は、真実の仏土を顕かにする『教行信証』『真仏土卷』に、人間の感覚や情緒に訴えるような教言を引用せず、例えば善導の「西方寂靜無為の樂は、畢竟逍遙して有無を離れたり」「極樂は無為涅槃の界なり」「弥陀の妙果をば号して無上涅槃と曰う」との文言を引用して、真仏土は無為涅槃界、無上涅槃のさとの世界であることを明らかにするのである。これについて長谷正當は次のように述べている。

浄土は、そこに如来が住み、働いている場所として仏国土である。そして、如来は、特定の場所に限られることのない無限な働きであるから、如来が働いている場所としての浄土も、特定の場所に限定されず、死後、現世、前世を包み込んで広がっている廣大・無辺な世界でなければならない。真の浄土がそのようなものであるなら、西方十萬億土の彼方において、七宝の池があり、金銀瑠璃に光り輝いて、種々の奇妙で雑色の鳥たちが四六時中雅びな声で鳴いている宮殿・樓閣のような極樂浄土は狭苦しくて真の浄土とはいえない。それは地上の樂の極まりであっても、息が詰まりそうである。しかし、そこに働いている如来の視野に立って見渡すならば、浄土はおのずから様子が違って来なければならない。それは「畢竟するに、虚空のごとく、廣大にして辺際なし」という世界となるのである。そのような、如来の働きという視点から見られた浄土は「報土」であり、それを親鸞は「真仏土」と名づけている。〔報土としての浄土』『哲学論集』第五十二号、六一七頁〕

如来は無限のはたらきである。したがって、その如来が活動する場所もまた限定されない廣大無辺の世界でなければならぬ。此の土の樂に模して語られる浄土は限定された世界であって、虚空のごとく辺際のない真実の浄土

とは言えない。報土としての真仏土は、まさに証大涅槃の境界なのである。このように、真仏土が大般涅槃界であることを明証するのは、「真仏土卷」に引用される諸文のなかでも、特に『涅槃經』の文である。

「真仏土卷」は、真実報土の開顯という課題に応えるべく、經文証として、まず『大經』とその異訳の『如来會』『平等覺經』『大阿彌陀經』の文を引用し、第十二・光明無量の願、第十三・壽命無量の願と、その願成就文によって、真仏・真土は一切の苦惱の衆生にはたらく光明界であることが明かされる。そして、続いて『不空羅索神變真言經』の文を引用して、衆生がまさに生まれるべきところは阿彌陀仏の清淨報土であり、その報土の壽命は無量であると説かれている。

そしてその後に、同じく經文証として『涅槃經』の文が引用されるが、それは「解脱」「涅槃」「仏性」の語を軸として、いわば如来の性そのものが究明されているのである。つまり「真仏土卷」は、真仏・真土の体相（はたらき）と本性（本質）の二義を明らかにする課題を有している、と言えるのではないだろうか。そこで本論では、「真仏土卷」における後者の課題について考究してみたい。^②

一、涅槃界としての真仏土

「真仏土卷」所引『涅槃經』の文は、分量にすると「真仏土卷」における引用文の半分近くを占めている。このことから、親鸞が真仏土を開顯していく上で、この經典に重要な意義を託していたことが窺える。周知のように、

『教行信証』「真仏土卷」所引『涅槃經』の文の意義

親鸞が用いた『涅槃經』は、詳しくは『大般涅槃經』と言い、部派仏教において編纂されたいわゆる小乗の『涅槃經』ではなく、「如来の法身常住」「涅槃の常樂我淨」「一切衆生悉有仏性」の三つの主題を説くいわゆる大乘の『涅槃經』³である。「真仏土卷」所引の『涅槃經』の文についても、この三主題に沿いながら十三文が引用されている。⁴

- ① 「四相品」―如来の法身常住 (『定親全』一、二三三―二三四頁)
- ② 「四依品」―同前 (同前、二三四頁)
- ③ 「聖行品」―涅槃の常德 (同前、二三四―二三五頁)
- ④ 「梵行品」―同前 (同前、二三五―二三六頁)
- ⑤ 「徳王品」―涅槃の樂徳 (同前、二三六―二三八頁)
- ⑥ 「徳王品」―涅槃の淨徳 (同前、二三八―二三九頁)
- ⑦ 「徳王品」―同前 (同前、二三九頁)
- ⑧ 「迦葉品」―一切衆生悉有仏性 (同前、二三九―二四一頁)
- ⑨ 「迦葉品」―同前 (同前、二四一―二四五頁)
- ⑩ 「梵行品」―同前 (同前、二四六頁)
- ⑪ 「迦葉品」―同前 (同前、同頁)
- ⑫ 「迦葉品」―同前 (同前、二四七頁)

⑬ 「師子吼品」―同前

(同前、二四八―二四九頁)

(品名は南本に拠る)

例えば、①「四相品」の文は、「真仏土卷」で先に引用された『大経』第十二願成就文と『大阿弥陀経』の文に述べられる「解脱」の語を受けて、その内実を明らかにするべく引用されている。また、③「聖行品」から⑦「徳王品」にかけては、如来の徳である常楽(我)浄について述べた教言を通して、大涅槃の性質について論証されていると思われる。③「聖行品」の「如来所有の功德、無量無辺不可称計」の語は、如来の境界は衆生の思慮分別がまったく及ばない無量無辺なる大涅槃界であることを説示しているのである。

涅槃おぼ減度といふ、無為といふ、安楽といふ、常楽といふ、実相といふ、法身といふ、法性といふ、真如といふ、一如といふ、仏性といふ、仏性すなわち如来なり。

(『定親全』三、一七〇―一七一頁)

この『唯信鈔文意』の文は、涅槃とは安楽世界であり、それは如来の性すなわち仏性そのものであることを、転釈を通して明らかにしているのであるが、まさに①から⑦までの文は涅槃の体性とその果徳を説示し、涅槃の実相について論じている。そして、⑧「迦葉品」以降の文では、一切衆生における仏性の有無について論じる仏性論が展開している、と見通すことができよう。

このように、「真仏土卷」所引の『涅槃経』の文は、無上涅槃としての如来を示し、真仏・真土が大涅槃界であることを明示している。しかし従来、例えば、

『涅槃経』の御引用の御思召は、一口にいえば、報身のすがたを示すことであるが、文が多いのと、義が複雑なのとで、一見してはつきりと御引用の旨意を捕捉することは出来ない。

(山辺習学・赤沼智善『教行信証講義 真仏土・化身土巻』一一一〇頁)

と論じられるように、煩瑣な転釈や難解な表現が多いために、『涅槃経』の諸文に託した親鸞の真意を正確に窺うことは困難であると了解されてきた。例えば、⑨「迦葉品」においては、一名に無量名を説くこと、一義に無量名を説くこと、無量義に無量名を説くことを具体的に例示して、如来が衆生に「広の中に略を説く、略の中に広を説く。第一義諦を説きて世諦とす。世諦の法を説きて第一義諦とす⁽⁶⁾」ることを知らしめようとする文であるが、なぜ詳細に異名を列挙・引用されたのかについて、親鸞の意趣を正確に了解することは困難であるように思われる。

そこで一つの試みとして、かつて筆者は、親鸞が『涅槃経』「四相品」の引用に際して用いなかった文、すなわち「乃至」した箇所を原文に確かめ、所引の文と比較・検討することによって、親鸞の思想的営為の意図を推究したことがある。⁽⁷⁾なぜ「乃至」された箇所に着目するのか。鳥越正道は、『教行信証』における「乃至」の意味について次のように論じている。

この語（「乃至」・引用者註）は（中略）経論釈の途中を乃至して引文する場合に使用されている。この語は、一般的には「中略」と現代語訳されている。しかしながら、「中略」というよりも「不出」という意味に了解したほうがよいように思われる。何故なら、「至乃」は中途を略するというよりも、もっと積極的意味、即ち、中途の文を引文しないことにより、原文の意味を変えたり、引文の意味をより鮮明化するはたらきをしているからである。

〔最終稿本 教行信証の復元研究〕二二七頁

「乃至」とは、鳥越が「引文の意味をより鮮明化するはたらきをしている」と述べるように、ある課題を明確に

するために、不必要・不適切な文を削除・整理したことを示す思索の痕跡である。このような視点から、親鸞の思索の過程を遡って窺うことによって、「真仏土巻」における『涅槃経』引用の課題の一端を明らかにすることができるのではないかと考えたからである。⁽⁸⁾

考察の詳細な内容については、既発表の拙論を参照していただきたいが、そこで明らかになったことは、「乃至」された箇所を丁寧にかめると、一つの共通する事柄が浮かび上がってくるということである。それは原文において、具体的な例や譬喩を用いて説明している箇所が、「真仏土巻」においては何れも「乃至」されているということである。われわれの現実に即して説かれた具体的な例や譬喩の話は、その長短を問わず、すべて「乃至」されているのである。

親鸞のこのような営為から教示されるのは、真仏土はわれわれ人間の觀念や想像の及ばない、人間界を超越した涅槃の境界であるということであろう。もとより真仏土は、衆生を救済しようとする大悲の誓願に酬報する仏土であり、救済を求める衆生の現実に相応する本願の浄土であるが、真仏土は根源的・本来的に大般涅槃界であるということを示している。これによって、『大経』とその異訳の經典に説かれる本願の浄土は、その本性において大般涅槃界であることが明証されるのである。

二、「仏性未来」の教説

ところで、親鸞は「真仏土卷」の結釈において、これまでに引用した経論釈の諸文を総括して、真仏土が安養浄刹の眞の報仏土であることを押さえた上で、仏性について次のように述べる。

惑染衆生於此不能見性所覆煩惱故『經』言我説十住菩薩少分見仏性故知到安樂仏国即必顯
 仏性由本願力回向故亦『經』言衆生未來具足莊嚴清淨之身而得見仏性

〔定親全〕一、二六四頁

これは、『涅槃経』の教えを基軸としながら、惑染の衆生における見仏性の課題について論ずるものである。ここで注意すべきことは、惑染の衆生は煩惱に覆われているために、此土において仏性を見ることはできない（不能見性）けれども、本願力回向に由るがゆえに、安樂仏国に到って必ず仏性を顕すのである（必顕仏性）と、対比の関係で語られている点である。はたしてこの結語は、われわれにいかなる思想的内実を教えるものであろうか。この点について、「真仏土卷」所引の『涅槃経』後半の文、すなわち「迦葉品」と「師子吼品」に展開される仏性論を中心に推究してみたい。

迦葉菩薩言世尊仏性者常猶如虚空何故如来説言未来如来若言一闍提輩無善法者一闍提輩於
 其同学同師父母親族妻子豈不当不生愛念心邪如其生者非是善乎

（同前、二三九—二四〇頁）

この「迦葉品」の文は、迦葉菩薩が世尊に対して、如来は虚空のごとき仏性をどうして未来であると説くのかと

いうことと、一闍提の輩が他者に対して愛念の心を生じるのは善ではないのかということを探ねるところである。「一闍提」とは「断善根」「信不具足」とも訳され、仏となる因がまったくない者のことである。この迦葉菩薩の問いに対して、仏は次のように答える。

仏性者猶如虚空、非過去、非未来、非現在、一切衆生有、三種身、所謂過去未来現在衆生未来具足莊嚴清淨之身、而得見、仏性、是故我言、仏性未来。

(同前、二四〇頁)

仏性は虚空のようであって、過去・未来・現在という三時に属するものではない。それに対して、過去・未来・現在という時間を歩む一切の衆生は、その未来において清淨の身となり仏性を見ることができるのである。煩惱具足の凡夫は、過去あるいは現在において仏性を見ることができず、清淨の身を具足莊嚴したとき、すなわち衆生にとっては純粹なる未来において仏性を見ることができると説かれる。それゆえに「仏性未来」と教示されるのである。

この世尊の応答に対して、迦葉菩薩はさらに「世尊、仏の所説の義のごとし。かくのごときの者、何がゆえぞ説きて「一切衆生悉有仏性」と言えるや」と、「仏性未来」と言うならば、仏はなぜ「一切衆生悉有仏性」と説くのかと問いを重ねるのであるが、それに対する世尊の答えは次の通りである。

善男子衆生、仏性雖現在無、不可言無、如虚空、性雖現在不得言無。

(同前)

衆生の仏性は現在に見ることはできなくても、本来無であると言うべきではない。それは虚空のようなものである。したがって、仏が「仏性未来」と言いつつ「一切衆生悉有仏性」と説くのは、衆生の仏性は現在に認めること

はできなくても、それは根本において一切無ではないことを指し示しているからである。この問答によって、仏性とは、その有無を論じられるべき性格のものではないことが明らかであろう。それゆえ、煩惱に覆われた衆生にとって、仏性はどこまでも未来に清浄の身を具足して開顕されるものとして押さえられるのである。この親鸞の了解を端的に表している箇所として、以下の文が挙げられよう。

衆生^レ仏性^モ亦復^シ如^レ是^一。如^レ汝^所言^一。一闍提輩^ト若有^下身業^ト口業^ト意業^ト取業^ト求業^ト後業^ト解業^ト如^レ是^一。等業^ト悉^ク是^レ邪業^ト。

(同前、二四一頁)

この文は、先の世尊の答えの一節であるが、『涅槃経』原文では次のように記されている。『国訳一切経』の訓みも同時に示しておく。

衆生^レ仏性^モ亦復^シ如^レ是^一。如^レ汝^所言^一。一闍提輩^ト有^レ善法^ト者^一。是^レ義^ト不^レ然^一。何^レ以^レ故^一。一闍提輩^ト若有^下身業^ト口業^ト意業^ト。取業^ト求業^ト施業^ト解業^ト。如^レ是^一。等業^ト悉^ク邪業^ト。

(『大正藏』第十二卷、北本・五六二頁c、南本・八〇九頁a、網掛引用者)

衆生の仏性も亦復是の如し。汝が言ふ所の如き、一闍提の輩に善法有りとは、是の義然らず。何を以ての故に。一闍提の輩に若し身業・口業・意業・取業・求業・施業・解業有るも、是の如き等の業は、悉く是れ邪業なり。

(『国訳一切経』涅槃部二、二五七頁、網掛引用者)

一読して明らかのように、親鸞の引用では、『涅槃経』原文の網掛箇所が「乃至」の指示もなされずに省略されている。もとの文意では、一闍提の諸業は善業などではなくことごとく邪業であって、一闍提の仏性と衆生の仏性

とは同一ではないと述べられている。それに対して親鸞の文脈では、衆生の仏性も一闍提の輩の業のようなものであって、それらはどこまでも邪業であると了解されているのである。つまり、煩惱の衆生の現実は一闍提と何ら変わることはないのであって、ここに親鸞における衆生の仏性観が的確に押さえられていると言えよう。¹⁰⁾

悪性さらにやめがたし

こゝろは蛇蝎のごとくなり

修善も雑毒なるゆへに

虚仮の行とぞなづけたる

（『正像末和讃』『定親全』二、二〇九頁）

この「愚柔悲歎述懐」の和讃に明らかのように、凡夫の本性とは悪性であり、それをやめることは本来的にできない。また、衆生のいかなる行為も虚仮不実の行である。それゆえ、感染の衆生が現生において自己の内に仏性を自覚するということは、到底あり得ないのである。なぜなら、われわれの存在自体が煩惱に覆われて濁っているからである。

したがって、われわれ凡夫が仏性を顕開するのは、煩惱熾盛の穢身たる現在ではなく、未来、すなわち眞実報土においてである。親鸞は上記の内実を、結釈において「安楽仏国に到れば、すなわち必ず仏性を顕す、本願力の回向に由るがゆえに」と明記していた。それはつまり、罪悪生死の凡夫は、選択本願の行信によって浄土に往生することを通して仏性を顕開するということである。親鸞において「仏性未来」の教説は、本願力回向に由って浄土に到り大涅槃を証することであると了解されていたのである。

ところで、次に引用される「迦葉品」の文は、親鸞における如来の法身観、ひいては仏性あるいは涅槃の内実を明確に表しているように思われる。

法身即是常樂我淨永離^{ハ、ナリク、レタズ、レハ}一切生老病死非白非黒非長非短非此非彼非学非無学^ヲ若仏出世及不出世常不^ニ動^シ無^ク有^ク變易^ト一
 『定親全』一、二四六頁、傍線引用者

この文は「真仏土卷」において、この直前に引用されている「迦葉品」の、第一義諦と世諦が「広中説略・略中説広」の関係であることを論じた文を受けて、仏身を有為法か無為法かのどちらかに固定的・実体的に捉えることを諫める文の一節である。この文は『国訳一切経』では次のように訓まれている。

法身は即ち是れ常・樂・我・淨なり、永く一切の生・老・病・死を離る。白に非ず、黒に非ず。長に非ず、短に非ず。此に非ず、彼に非ず。学に非ず、無学に非ず。若しは仏の出世にも及び不出世にも、常住にして動ぜず、變易有ること無し。
 『国訳一切経』涅槃部二、二七三頁、傍線引用者

傍線を付した箇所を比較すると、『国訳一切経』の訓みでは、仏の法身は「一切の生老病死を離れたもの」であり、「非白非黒、非長非短、非此非彼、非学非無学なるもの」と定義されている。それに対して親鸞の訓みでは、「一切の生老病死を離れている」のは当然のこと、「非白非黒、非長非短、非此非彼、非学非無学なるものと定義することすらも、離れたもの」として、より本質的・根源的に了解されていることが窺われる。法身は此彼の区別をも超越した真の常樂我淨なのである。したがって、如来は仏性であり涅槃であるから、常樂我淨をその内実とする仏性あるいは涅槃は、人間の思慮分別を超越したものであると言うことができよう。

三、仏性すなわち如来なり

又言如我所説十二部經^ノ或隨自意説^ハ或隨他意説^ハ或隨自他意説^{ナリ}

〔『定親全』一、二四七頁〕

これは、先の「迦葉品」に続いて引用される文であるが、以下、仏の隨自意説、隨他意説、隨自他意説が述べられていく。まず隨他意説とは、仏が相手の素質や能力に応じて説くことであり、ここでは「十住の菩薩少しき仏性を見る¹²」と明らかにされている。また隨自意説とは、仏自身の智見にしたがって説くことであり、「常に一切衆生悉有仏性と宣説する¹³」ことである。そして隨自他意説とは、自他の意にしたがって説くことであり、「一切衆生はことごとく仏性あれども、煩惱覆えるがゆえに見ることを得ることあたわず¹⁴」と明らかにされるのである。

ここで注目すべき点は、親鸞の隨他意説の訓みである。その該當箇所を、『涅槃經』原文、『国訳一切経』の訓み、親鸞の訓み（書き下し）の順で列挙してみよう。

十住菩薩得首楞嚴等三昧三千法門。是故了了自知^レ當得阿耨多羅三藐三菩提。不見^レ一切衆生定得阿耨多羅三藐三菩提。是故我說十住菩薩少分見^レ仏性。

〔『大正藏』第十二卷、北本・五七三頁c、南本・八二〇頁c、網掛引用者〕

十住の菩薩は、首楞嚴等の三昧・三千の法門を得。是の故に了了に自ら當に阿耨多羅三藐三菩提を得べく、一切衆生の定んで阿耨多羅三藐三菩提を得るを見ざるを知る。是の故に我は「十住の菩薩は少しく仏性を見る」と説く。

〔『国訳一切経』涅槃部二、二九八頁、網掛及び傍線引用者〕

十住の菩薩は首楞嚴等の三昧・三千の法門を得たり。是の故に声聞自ら知りて当に阿耨多羅三藐三菩提を得べくとも、一切衆生定んで阿耨多羅三藐三菩提を得んことを見ず。是の故に我「十住の菩薩、少分仏性を見る」と説くなり。〔定親全〕一、二四七頁、原漢文、網掛及び傍線引用者）

まず、『国訳一切経』の訓みにしたがうならば、十住の菩薩は自ら明瞭に阿耨多羅三藐三菩提を得て、さらに、一切衆生が阿耨多羅三藐三菩提を得ることを知らないことをも覚知する。それに対して親鸞の訓みでは、十住の菩薩は首楞嚴などの三昧・三千の法門を得ているがゆえに、自身が阿耨多羅三藐三菩提を得ることは知っているが、一切の衆生が阿耨多羅三藐三菩提を得るということは知らない、という意味になる。つまり『国訳一切経』の訓みでは、十住の菩薩は肯定的側面から論じられているのに対して、親鸞は十住の菩薩について、その否定的側面を明らかにしていることが窺えよう。

この差異は、『涅槃経』原文では「了了」と記されている箇所を、親鸞は「声聞」と書き改めている点からも推察できるのではないだろうか。「十住の菩薩、少分仏性を見る」の仏語は、十住の菩薩でさえも一切衆生を見そなわすことはできないことを示す文として理解されていると思われる。

そして、この十住の菩薩の実相をさらに傍証するのが、続いて引用される「師子吼品」の文であろう。この一段では、「眼見」と「聞見」の語が基軸となつて論が展開するのであるが、例えば次のように述べられている。

十住菩薩聞見^ノ 仏性^{スレトモ} 故^{コトサラス} 不^{ナラ} 了^{ナラ} 了^{ナラ} 十住菩薩唯能自知^ノ 定得^{テコトヲ} 阿耨多羅三藐三菩提^ヲ 而^{テス} 不^ハ 能^ハ 知^{コト} 一切衆生悉有^ハ 仏性^ヲ 善男子復有^リ 眼見^ニ 諸仏如来^{ナリ} 十住菩薩眼見^シ 仏性^ヲ 復有^リ 聞見^{スルコト} 一切衆生乃至九地^{マデニ} 聞見^ス 仏性^ヲ 菩薩若

聞^{カトモ}三 一切衆生悉有^{クハト} 仏性^ニ 心不^ニ 生^ニ 信^ニ 不^ニ 名^ニ 聞見^ト

(同前、二四八頁)

先述したように、まずここに、十住の菩薩が仏性を見ることは「了了」ではないこと、菩薩自身は阿耨多羅三藐三菩提を得ることを知っているが、一切衆生に仏性があることは知らないということが記されている。そして、菩薩が「一切衆生悉有仏性」と聞いて心に信を生じなければ、それは聞見ではないと明らかになっている。換言すれば、心に信を生ずることこそが「聞見」の内実であると言えよう。

これによって、「聞見」とは「聞信」と同意であることが窺えよう。「聞見仏性」とは現在における信心獲得の上上に起きることであり、その必然的未來が安樂淨土における「必顯仏性」として展開するのである。親鸞において仏性は、有無を論ずる問題ではなかった。仏性の有無はあくまでも仏陀の智見の範疇であり、われわれにおいて仏性の問題は、見・不見をもって示される信・不信の問題であらう。⁽¹⁵⁾

この信樂は衆生をして無上涅槃にいたらしむる心なり、この心すなわち大菩提心なり、大慈大悲心なり。この信心すなわち仏性なり、すなわち如来なり。

〔定親全〕三、一七五頁)

この『唯信鈔文意』の文に端的に示されているように、眞實信心は衆生をして無上涅槃に至らしめる因であるが、それが成就するのは、その信心自体が仏の大慈大悲心であり、仏性であり、如来自身であるからである。したがって、安樂仏国に到って大涅槃を証するという顯仏性の課題は、本願力回向に由って信心を獲得した現在の一念に、聞信の自覚として成就するのである。そこには、たとえ衆生が煩惱に覆われて仏性を見ることができないとしても、仏性を開顯せしめようという仏の大慈大悲心が現前・現成しているのである。したがって「仏性未來」とは、衆生

の努力の末に獲得する未来の果などではなく、現在に生きる衆生にはたらく仏の願心であると言えよう。

涅槃おぼ減度といふ、無為といふ、安樂といふ、常樂といふ、実相といふ、法身といふ、法性といふ、真如といふ、一如といふ、仏性といふ、仏性すなわち如来なり。この如来微塵世界にみち／＼たまへり、すなわち一切群生海の心なり、この心に誓願を信樂するがゆへに、この信心すなわち仏性なり、仏性すなわち法性なり、法性すなわち法身なり。

〔唯信鈔文意〕『定親全』三、一七〇—一七一頁

涅槃は仏性であり如来である。そしてその如来は、微塵世界に遍満し一切群萌の心として成就する。そのような心に誓願を信樂するがゆえに、この信心は仏性であると示されている。これらの転釈は、親鸞の仏性論は、聖道門で説示されるような、仏となる可能性や成仏の因を説明するものではない。親鸞の語る仏性とは、如来そのものであって仏の本質を意味しているのである。¹⁶⁾

したがって仏性は、真実報土たる真仏土の本性である。仏性とは、いわば見る対象として自身の内外に見出すものではない（不能見性）。それはどこまでも安樂仏国において自然に顕開されるものである（必顕仏性）。ここに、「真仏土巻」結釈において、「ここにして性を見ることあたわず、煩惱に覆わるるがゆえに」に対して、「安樂仏国に到れば、すなわち必ず仏性を顕す、本願力の回向に由るがゆえに」、「未来に清浄の身を具足莊嚴して、仏性を見ることを得」と結語される意義がある。親鸞は『涅槃経』の「仏性未来」の教説を、本願力回向に由って真実報土に到り大般涅槃を超証することであると了解していたのである。

平等心をうるときを

一子地となづけたり

一子地は仏性なり

安養にいたりてさとるべし

如来すなわち涅槃なり

涅槃を仏性となづけたり

凡地にしてはさとられず

安養にいたりて証すべし

信心よろこぶそのひとを

如来とひとしときたまふ

大信心は仏性なり

仏性すなはち如来なり

〔浄土和讃』『定親全』二、五六―五七頁〕

これら一連の和讃に、あらためて、衆生に獲得される眞実信心は安養浄土、すなわち如来そのものの世界に到って自証される仏性であることが明らかであろう。凡夫において仏性や涅槃は、如来に対する一心帰命の信において自然に感得される。衆生において仏性とは、「如来よりたまはりたる信心⁽¹⁷⁾」としてまさしく現働している。親鸞はこの道理を、信心における仏性としてわれわれに当来すると明確に示しているのである⁽¹⁸⁾。

おわりに

『教行信証』『真仏土巻』において、『涅槃経』の文が引用された後、続いて『浄土論』と『註論』（『浄土論註』）における確認へと展開していく。

『浄土論』曰世尊我一心帰命（一） 尽十方無碍光如来（二）願（三）生（四）安樂国（五）觀（六）彼世界相（七）勝（八）過（九）三界道（一〇）究竟如（一一）虛空（一二）广大（一三）無（一四）二（一五）辺際（一六）（『定親全』一、二四九―二五〇頁）

この『浄土論』の文では、まず世親の尽十方無碍光如来と安樂国への帰命・願生の信念が述べられているのだが、ここで注目すべき点は、「願生安樂国」の後に記される成上起下の文、「我依（一）修多羅（二） 眞実功德相（三） 説（四）願偈（五）總持（六） 与（七）仏教（八）相応（九）」が「乃至」の指示もなく省略され、莊嚴清淨功德成就と莊嚴量功德成就の文が一連の文章として読まれるように引用されていることである。これらの二文は、眞仏土が三界を超絶した清淨にして廣大無辺際なる涅槃界であることを表しているのであるが、この親鸞の引用方法は、帰命・願生の信心に無上涅槃界が開示されることを示唆しているのである。したがって、その往生の相もまた「皆受自然虚無之身無極之体（一〇）」として教示されるのである。如来の浄土は無生の生の世界であり、無為自然の境界なのである。

『註論』曰莊嚴清淨功德成就者偈言（一） 觀彼世界相勝過三界道故（二）此云何不思議（三） 有（四）凡夫人煩惱成就（五）亦得（六）生（七）彼浄土（八）三界繫業畢竟（九）不（一〇）牽（一一）則是不（一二）断（一三）煩惱（一四）得（一五）涅槃分（一六）焉（一七） 可（一八）思議（一九）（同前、二五〇頁）

これは、続いて引用される『論註』の莊嚴清淨功德成就の文である。ここに、煩惱成就の凡夫が浄土に生まれる

ことを得たならば、煩惱を断することなく涅槃分を得ると説かれているのも、浄土は何よりも涅槃の境界だからである。眞実信心に自覚される眞実の浄土は、三界の繋業を勝過した清浄世界なのである。

そして、次の莊嚴性功德成就の文は、『論註』自身の文脈においては浄土の性功德を説くが、それは仏の性、すなわち仏性と別ではない。

安樂浄土諸往生者無不淨色無不淨心畢竟皆得清浄平等無為法身以安樂国土清浄性成就故

(同前、二五一頁)

安樂浄土に到れば、あらゆる往生人は清浄平等無為法身を証する。なぜなら、浄土こそ如来の清浄の性、すなわち仏性の境界だからである。

すでに明らかなように、『涅槃經』の文は、「眞仏土卷」所引の『大經』に説かれるところの本願の浄土は、実は大般涅槃界であるということを教証する意義を有していた。また、先述の『浄土論』『論註』の文も同様に、浄土が安養淨刹の涅槃界であることを明証しているのである。これについて金子大榮は次のように教示している。

吾々が彼岸の世界と称するものは、涅槃の境地と本質的には別なるものではない。されば浄土として種々の莊嚴を説かるゝも、畢竟は涅槃の内徳を表顯するものと見るべきであらう。故に『無量寿經』には浄土を無為自然於泥洹之道と説き、『浄土論』には二十九種の莊嚴は「一法句に入る、一法句は即ち清浄句、清浄句は即ち眞実智慧無為法身」と解してある。之に依りて善導は極樂無為涅槃界と歌ひ、親鸞は眞仏土を証明するに『涅槃經』を以つてして、眞実の仏土即ち大涅槃界なることを明かにした。

〔彼岸の世界〕『金子大榮著作集』第三卷、二六一頁

一切群萌の帰依処である真仏土は、本願成就の光明の世界であると同時に、実は如來の大般涅槃の境地であった。第十二・光明無量の願、第十三・壽命無量の願に酬報した真実の浄土、本願酬報の仏土の内実は、一法句すなわち無為涅槃界であるということがここに明らかにされるのである。このように真仏土は、真仏・真土の体相とその本性の二義でもって開顯されていると言うことができよう。

凡例

- ・引用文中の漢字は現行の通行体に改め、左訓はすべて省略した。
- ・出典の略記は次の通りである。

『真聖全』——『真宗聖教全書』（大八木興文堂）

『定親全』——『定本親鸞聖人全集』（法蔵館）

『大正蔵』——『大正新脩大蔵経』（大正新脩大蔵経刊行会）

註

- (1) 「真仏土卷」「定親全」一、二六二—二六三頁、原漢文
 - (2) 真仏土の体相(はたらき)については、すでに拙稿『教行信証』の構造についての「考察—「仏土の卷」の意義—」(『真宗教学研究』第二十五号、真宗教学学会、二〇〇四年)、「浄土の開顕」(『現代と親鸞』第十一号、親鸞仏教センター、二〇〇六年)などで少しく考察した。詳しくはそちらを参照されたい。
 - (3) 大乘の『涅槃経』の漢訳本は、一般に三本あると言われている。
 - ① 大般涅槃経(北本涅槃経) 四十卷十三品、北涼・曇無讖訳
 - ② 大般涅槃経(南本涅槃経) 三十六卷二十五品、宋の慧観・慧嚴などの再治本
 - ③ 大般泥洹経六卷、東晋の法顕・仏陀跋陀羅の訳本論では①と②を合わせて参照し、①を「北本」、②を「南本」と略記する。
 - (4) 「真仏土卷」所引『涅槃経』の科文数については、ほかに十一文、十四文に分科する説もあるが、いまは便宜上、十三文に分科することにする。
 - (5) 「真仏土卷」「定親全」一、二三五頁、原漢文
 - (6) 同前、二四五頁、原漢文
 - (7) 拙稿「真仏土卷」所引『涅槃経』の文の意義—「乃至」された箇所を手がかりとして—(『真宗研究』第四十九輯、真宗連合学会、二〇〇五年)
 - (8) 『教行信証』「信卷」で「乃至」された箇所を考究した論稿に、小妻典文『教行証文類』「信卷」における〈乃至〉をめぐる諸問題」(『真宗総合研究所 研究所紀要』第七号、大谷大学真宗総合研究所、一九八九年)がある。
 - (9) 「真仏土卷」「定親全」一、二四〇頁、原漢文
 - (10) この了解については、すでに藤場俊基が指摘している。詳しくは、藤場『親鸞の教行信証を読み解くⅢ—証・真仏土卷—』(明石書店、一九九九年)、一八三—一八六頁を参照。
- なお、親鸞が『涅槃経』のどの写本を参照していたか不明である以上、「真仏土卷」所引『涅槃経』の文と、『大正蔵』の原文や『国訳一切経』の訓みとを比較・検討することが、親鸞の思想を考究する上でどこまで有効か、議論の余地が残る間

題である。しかし本論では、親鸞が真仏土を開顕するに際して、『涅槃経』の文に託した意義を推究する一助として、考察を行ったものである。

(11) 『真仏土卷』『定親全』一、二四五頁参照

(12) 同前、二四七頁、原漢文

(13) 同前

(14) 同前

(15) 三明智彰は「私は、親鸞の言う「仏性」とは、「可能性」ではなく、本願発起から永劫修行・浄土建立を以て示される活動的如來の無縁の大悲を指すと領解する」「親鸞に於ては仏性論は、有無の問題ではなく見・不見を以て示される信・不信の問題であると考えている」「親鸞の仏性論」「真宗教学研究」第十号、二五頁、真宗教学学会、一九八六年」と述べている。本論はこの了解に示唆を受けたものである。

(16) また三明は、「親鸞に於ては、仏性とは、聖道門の理説ではなく、また、成仏の可能性ではなく、如來の本質・如來のあり方を意味するのであって、それは、浄土を建立し、衆生の行信となつてはたらく如來の活動的大悲を指すものである」「真の報仏土」「教行信証」「真仏土卷」の『涅槃経』・『浄土論』・『浄土論註』の文を中心として」「親鸞教学」第五十九号、三八頁、大谷大学真宗学会、一九九二年」と論じている。

(17) 『欺異抄』『定親全』四、一〇・三五頁

(18) 例えば田代俊孝が、「我々において他力の信心ということを離れては、仏性も如來もありえない。信においてのみ、仏性の真の意義があるのである」(『唯信鈔文意講義』一二六頁、法蔵館、二〇一二年)と指摘するように、親鸞の仏性了解は「信心仏性」論として、『教行信証』『信卷』や『唯信鈔文意』などに教示されている。今回は紙幅の都合上、尋ね入ることができなかった。今後の課題としたい。

(19) 『浄土論』『真聖全』一、二六九頁

(20) 『真仏土卷』『定親全』一、二六五―二六六頁) 所引、『大無量寿経』の文